第１回瀬戸内海魚類研究会報告：45－48, 2000

最近年における和歌山県沿岸でのタチウオ漁の動向

吉村　晃一（和歌山県農林水産総合技術センター水産試験場）

１．はじめに

1992年頃から紀伊水道外域におけるタチウオ一本釣漁は漁法の改良ならびに普及に伴い、近年この漁に依存する割合が高まっている。ここでは最近年における本県のタチウオ漁の動きを把握するため、県漁獲の大半を占める小型底びき網と一本釣の現状を既存水揚記録より整理検討を行った。

２．方　法

使用した資料は和歌山農林水産統計年報、比井崎・南部町・御坊市・箕島町漁協の水揚量統計である。そして、御坊市漁協所属一本釣り標本船１隻、箕島町漁協所属小型底びき網標本船２隻から銘柄別・月別漁獲量・単価の推移、ＣＰＵＥ・漁場の整理等を行った。

３．結　果

（１）漁協別漁獲量

和歌山県沿岸におけるタチウオ水揚げの主要港は、図１に示した小型底びき網の箕島町、一本釣りの漁獲が顕著な比井崎・御坊市・南部町・田辺である。

箕島町漁協の1998年タチウオ漁獲量は3629トンで和歌山県全体の79％を占めている。この率は1994年の60.4％が最低でその後年々増加している。年漁獲量は1986年以降漸減傾向にあり、近年では1997年の3422トンが最低である。

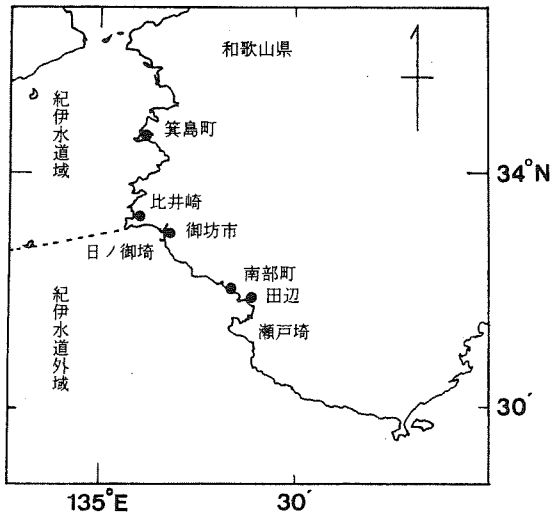

図１　和歌山県沿岸におけるタチウオ水揚の主要港

タチウオ一本釣りは紀伊水道外域が主漁場である。比井崎漁協では古くから操業されていた漁法の疑似餌釣りから、改良を加え選択的に大型魚を釣獲する餌釣り漁法を徳島県から導入普及した。この影響は1994年頃から南部町・御坊市の漁獲量増加として現れ始めた（図２）。この時期は、まき網による混獲も多く漁業調整が必要となった。その後は、巻き網の自粛と他魚種の不振が重なりタチウオの依存度が増したことにより、従来の疑似餌によるタチウオ一本釣からサンマ・イワシの切り身を餌とする改良漁法の普及が進んだ。1992年からの御坊市年漁獲量は1994年の最高漁獲量379トンを境に減少し始め1997年には188トンまで落ち込んだ。1998年は 290トンで前年より増加した。

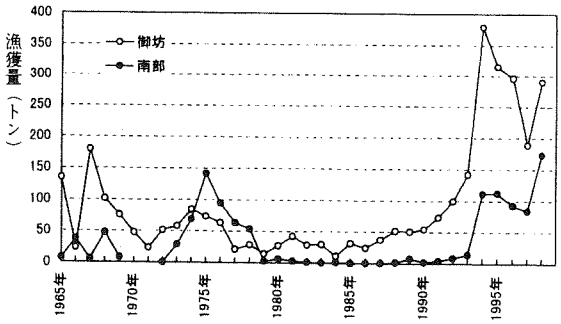

図２　紀伊水道外域におけるタチウオ漁獲量の経年変化（1965～1998年）

（２）銘柄別漁獲量

各漁協における一本釣りによるタチウオの水揚げは魚体重毎に選別され販売されているが、銘柄別水揚量が整理できている比井崎漁協では以下の６銘柄に分けられている。魚体重別に「特大」は600g以上、「大大」は400g～600g、「大」は200g～400g、「小」は150g～200gに、この他にも「キズ」や「下」の銘柄がある。「下」は尾が切れた物で比較的大きい物が多い。

銘柄別重量組成の推移を図３に示す。1999年９月ま

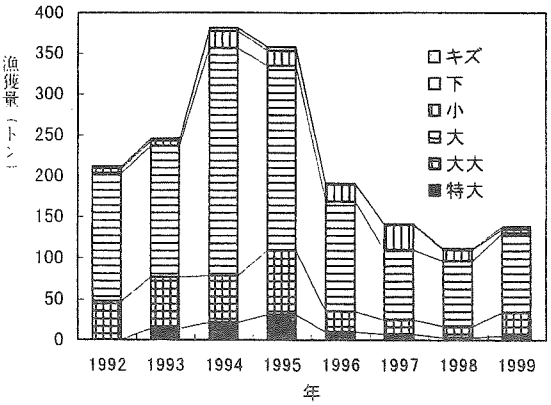

図３　銘柄別漁獲重量組成
（一本釣，比井崎，1992～1999年9月）

での集計では銘柄小が４％、大大が21％になり、ほぼ高水準時の漁獲組成に戻った。1992年以降で最低漁獲量であった1997年は銘柄大大と大は減少、かわって小が増加している。

一方、紀伊水道内海域を主漁場とする箕島町漁協の小底の銘柄別重量組成の推移を図４に示す。箕島町漁協のタチウオ取り扱い銘柄は体長（肛門長）により４

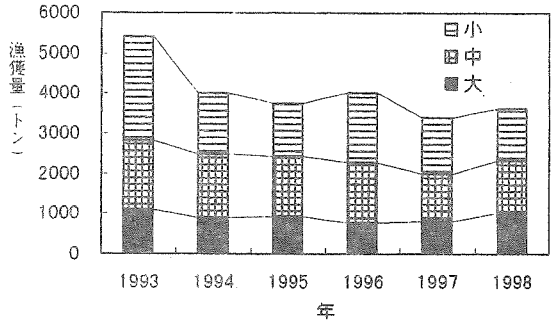

図４　銘柄別漁獲重量組成
（小底，箕島町，1993～1998年）

銘柄に区分されている。「特大」は28cm以上、「大」は25～28cm、「中」は20～25cm、「小」18cm以下の区分である。魚体重に換算すると概数で特大300g以上大200～300g、中150～200g、小150g以下となる。

最近年における漁獲量の増減が大きかった1997、1998年について紀伊水道外域のものと時期を対応させた銘柄組成では、外域とは逆に銘柄小が減少、大が増加している。特に、1998年の銘柄大は重量組成でも28％で1993年以降の最高値を示した。

（３）月別漁獲量

箕島町漁協小底の月別漁獲量を1996年から1998年までの３年間を図５に示す。２～３、５～６、８～10月の３峰がみられる年と、春５～６月に漁獲の峰があまりみられない年が繰り返されている。1998年は４～11月まで毎月300～400トンの漁獲でこれといった盛漁期がないまま経過した。

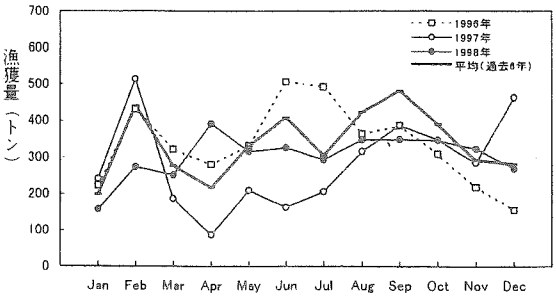

図５　タチウオ月別漁獲量（小底，箕島町）

一方、一本釣の経過は、御坊市漁協のもので代表させ、1993年から1999年９月までを旬ごとのＣＰＵＥ（kg ／日）として図６に示した。1993年からでは漁獲盛期は概ね７月以降10月までの秋漁であることが過去６年平均から推測される。この傾向は1998年まで続いたが、３～５月に現れる春タチウオの大型の産卵群が1998年には３月に1999年には４～５月にＣＰＵＥで平年値（1993～1998年平均）の２倍強として出現し、９月末まで活況を呈した。平年とは異なる２峰が明瞭に現れた。

（４）操業状況

小底については箕島町漁協所属の２隻の標本船、一本釣りについては御坊市漁協所属の１隻の標本船から月別に操業海域を整理した。標本日誌記録は1997～1999年にかけての約２年間である。

小底の操業海域は、1997年春４～６月に紀伊水道外域での操業があった以外は外域での操業はなかった。利用海域の頻度が高いのは有田市沖ノ島沖から湯浅湾沖で、９～11月の盛漁期には紀伊水道域南部（日ノ御埼沖合付近）での操業率は低くなる。

一本釣については、1997年５月から1998年12月までの資料から1998年の操業海域を月毎に整理したのが図７である。釣獲水深は10～220mぐらいまでで、操業海域は日ノ御埼と瀬戸埼真西に挟まれた陸棚斜面全域である。漁場は冬期（12～３月）には200m等深線付近にあり、その後、４月頃から浅い水深に移動し始め、６～７月には水深10mぐらいまで接岸している。８月

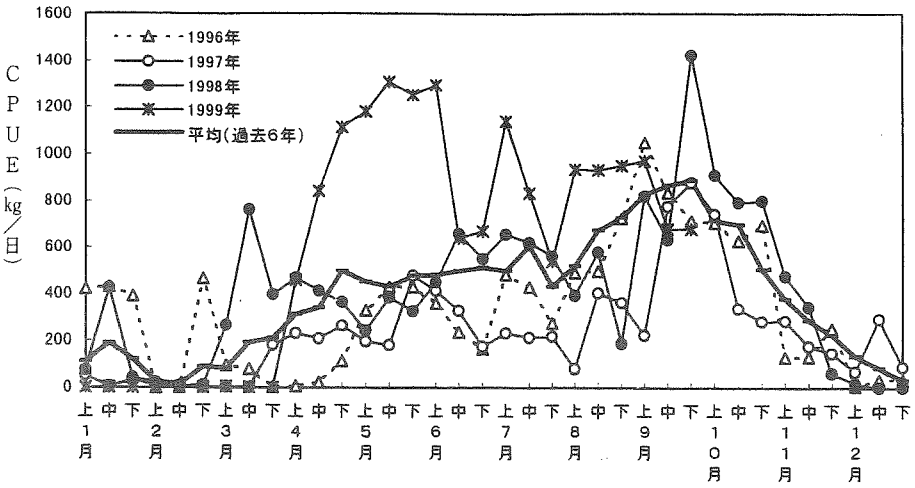

図6　旬別CPUEの変動（一本釣，御坊市，1993～1999年9月）

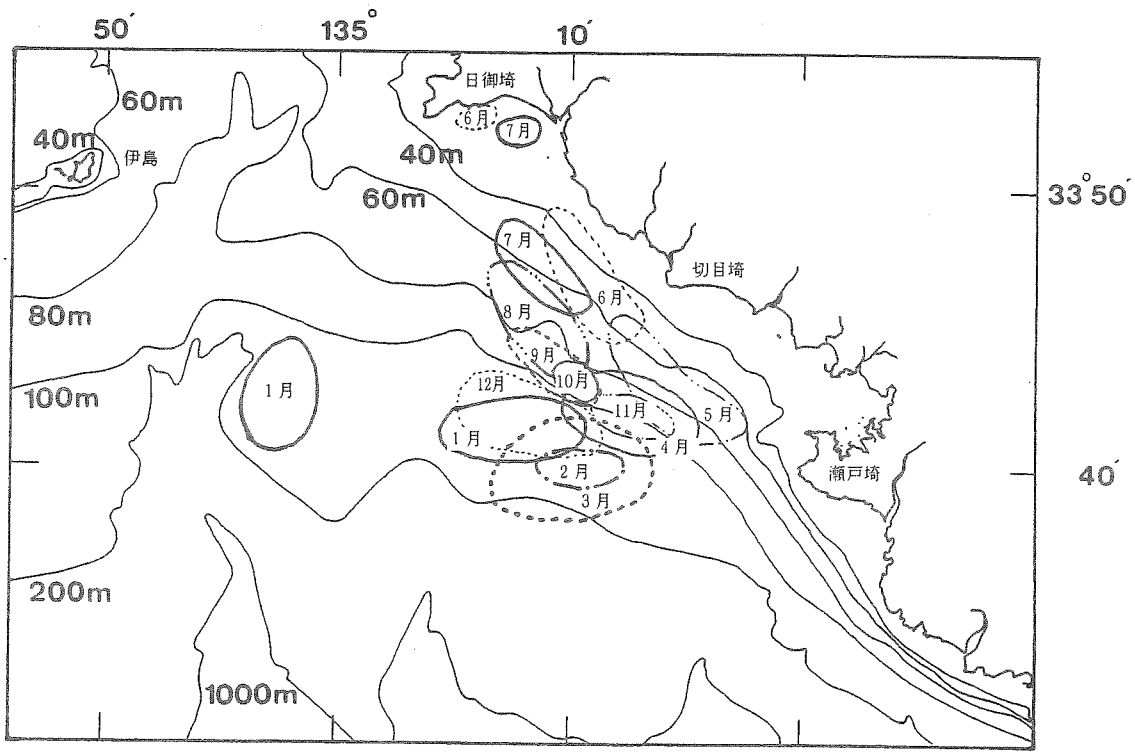

図7　紀伊水道外域におけるタチウオ漁場の推移（一本釣，御坊市，1998年1～12月）

頃から深所への移動が始まって12月頃水深200m付近に分布するサイクルがみられた。

（5）価格の動向

1996年2月から1999年8月まで箕島町漁協所属の標本船2隻による月平均単価を図8に示した。販売の仕切りとしては、1999年春頃までは「特大・大」と「中以下」の2通りとタチウオ以外の他魚種に分かれていた。この時期以降は多量購入者が現れ銘柄でシラガと呼ばれて投棄されていたものまで値が付くようになったのに合わせ銘柄も細かくなった。特大・大・中と合わせた物は通常特大・大が少ない時で大半が中の時の販売状況である。銘柄が細分される状況は同年7月頃から顕著にみられた。

一方、一本釣のタチウオ魚価の動きは、比井崎漁協の月別単価からその変動傾向を窺うと1997年7月頃の最高値から魚価安が続き、1999年は1993～1994年並で推移している。銘柄大大ではkg当たり1000円までの値動きである。

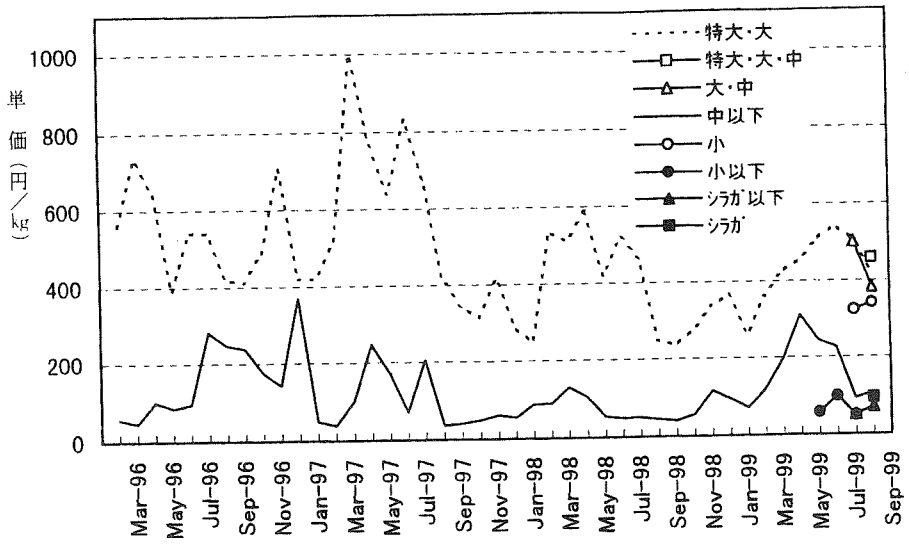

図８　タチウオ銘柄別単価の月別変化（小底標本船２隻平均）